



馬 耳 東 風

その昔、阪急ブレーブス（現在のオリックス・バファローズ）にバルボンという俊足好打のキューバ出身の内野手がいた。彼が現役当時、パ・リーグでは西鉄ライオンズや南海ホークスが強く、中西、豊田、稲尾、杉浦といったスター選手が綺羅星のごとくいたにもかかわらず、私はどういうわけかこの選手の方が好きであった。それには彼のプレーはもちろんのことであるが、彼が話す関西弁から受ける印象も多分に影響していたと思う。彼はインタビューされるといつも最初と最後に「アジャパー」と言っていたが、これはチームメートがいつでも使える日本語の便利な挨拶の言葉としてイタズラして教えたのを真に受けていたからだという。アジャパーというのは喜劇俳優であった伴淳三郎が広めた流行語である。当時そんなこと知る由もない私は「オモロイ外人」だと思っていたが、彼の関西弁には人柄が滲みでたとしか思えない何とも言えぬ暖かさがあつた。バルボンはキューバ革命により帰国が困難になって、引退後も日本に残り関西在住60年になるという。私は長い間、バルボンは日本が好きで永住したのだとばかり思っていたが、実はキューバ革命による政治情勢でそうせざるを得なくなったのだということを知ったのは、随分あとのことであつた。10年程前メキシコに赴任していた時、テキーラがあまり好きになれずラム酒をよく飲んでしたが、私はハバナクラブという銘柄が気に入っていた。ところがこれはキューバ産であつたため、普段利用していた米国資本のスーパーマーケット（ウォルマート）では売られていなかった。ハバナクラブを買いに別の店に行くたびに、経済封鎖とはこういうものかと実感したものだつた。バルボンの日本永住もハバナクラブの件も、私にと

っては普段はあまり意識しない国際政治について考えさせられた出来事であつた。

キューバといえば野球とともに音楽の国と言っても過言ではないだろう。キューバ土着の音楽、ソンヤルンバからマンボやチャチャチャ、サルサが生まれたのだから。十数年前、「ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ」という映画がヒットし、キューバ音楽に関心を持たれた方もおられると思うが、この映画が作られたのは同名のキューバ音楽のアルバムが世界中で大ヒットしたからであり、それがなければ作られなかった映画である。映画は、この音楽アルバムに登場するコンパイ・セグンドやイブライム・フェレール等のキューバの老ミュージシャンひとりひとりの日常を追ったドキュメンタリーなのである。

私は昨年6月念願のハバナに行ったが、テレビで何度か見たとおり、車は50年代の米国車であり、インフラの老朽化は深刻であつた。私が泊まった旧市街のヘミングウェイが常宿としていたホテルの部屋に冷蔵庫はなく、快適とは言い難かつた。しかしキューバ音楽のライブは素晴らしく、客を巻き込んで踊り歩くさまは、まるで阿波踊りのようであつた。また行きたいなあと思つて浸っていた昨年暮れ、米国がキューバとの国交を正常化するとニュースを聞いた。ニッケル輸出に次いで観光収入が外貨獲得源となっているキューバにとって、米国との国交が正常化されれば、経済的には多くのメリットがあり、インフラも急速に整備されるだろう。しかし米国資本がどつと入ってきて、瞬間に米国化してしまう懸念もある。キューバにハンバーガーやフライドチキンの店は来て欲しくないと思うのは旅行者の身勝手だろうか。今後キューバがどのような道を歩むのか見守りたい。

(久)